

かさまのれきし

第62回

香取小原神社の算額

友部駅北口から北東へ、大原小学校を指して、さらに北へ進むと右側に香取小原神社が祀られています。社伝によりますと、

久寿二年(一一五五)、下総国の香取神宮

(千葉県香取市)の分霊を迎えて小原・上郷の香取神社と称しました。明治六年(一八七三)の社寺改正によって、小原・上郷の鎮守で「小原神社」となりましたが、のちに「香取小原神社」と改められました。

香取小原神社の本殿は、流造銅葺きの一五坪の造りで、拝殿は間口三・五間(約六・四メートル)、奥行き二間(約三・六メートル)の入母屋破風トタン葺きの建物です。江戸時代に発達した数学「和算」の間答術を額に記して神社仏閣に奉納した「絵馬」は「算額」と呼ばれています。

香取小原神社の算額は、縦三尺(約九十二センチメートル)、横五尺(約百五十二センチメートル)の板額で、昭和二年(一九二七)に奉納されています。茨城県内には、十八面の算額が現存しますが、うち十三面が明治以降の奉納です。同社の算額は、「昭和の算額」と呼ばれ、県内に残る算額の中で最も新しいものです。昭和の初め頃

まで、和算を研究する人たちがいたことが分かる貴重なものです。

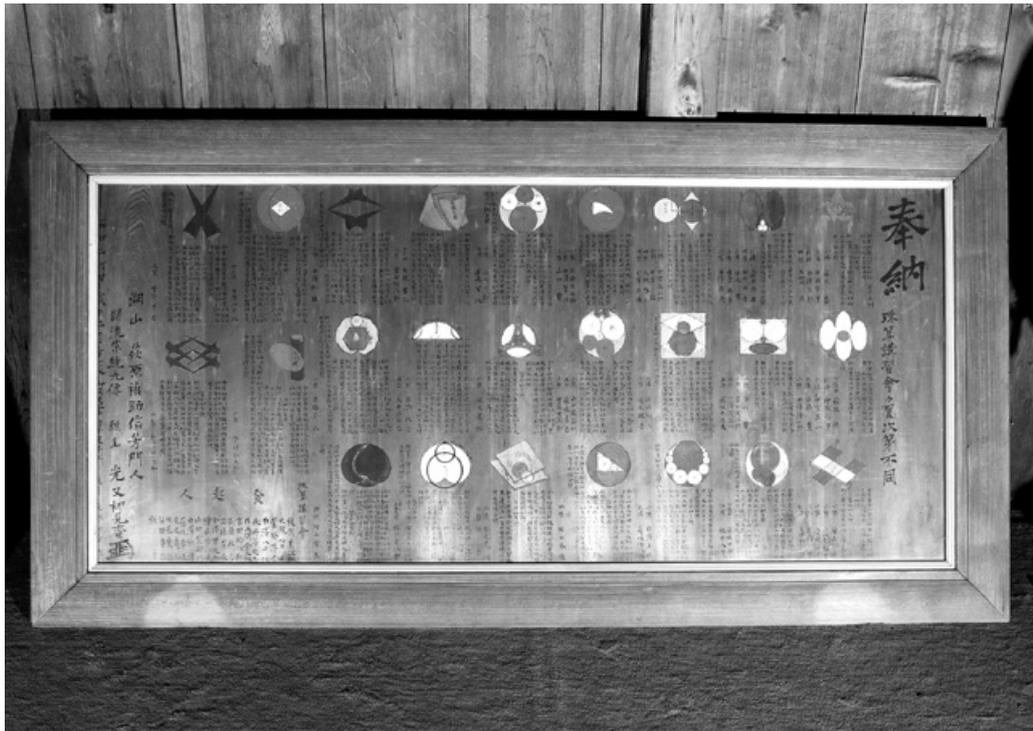
願主は小原・原坪の光又柳見齋で、珠算講習会会員十八名が考えた算問二十五題の円・三角・四角・ひし形など幾何学的図形が描かれ、計算問題と解答が漢文で書かれています。

光又柳見齋の旧名は白澤寅之介で、慶応二年(一八六六)に生まれ、原坪の光又家の婿養子となりました。

寅之介は幼い頃から算数や珠算に興味をもち、長じて明野町(現筑西市)の廣瀬市右衛門國治に算法を、群馬県の萩原禎助信芳に和算を学びました。この算額には、萩原禎助信芳門人と記されています。なお、光又柳見齋は、のちに小原に珠算講習会を組織し和算の研究をしたといわれています。また、茨城県内の算額を記録した『算法廟堂揭示録』を遺しています。

この算額は、平成三年(一九九一)に友部町有形民俗文化財として指定され、現在は笠間市指定文化財となっています。

(市史研究員 福島和彦)



香取小原神社の算額 (市指定文化財)